

「見る」以外の方法でも楽しめる写真展が、京都市北区の「アトリエみつしまSawa-Tadori」で開かれている。盲学校に通う子どもたちを写した写真を、京都ゆかりの全盲の美術家と研究者が協力し、凹凸のある「触る写真」にした。新型コロナウイルス流行下でも、目が見える人と見えない人が対話しながら作品を読み解くことで互いを知る機会を設ける。

触る 写真展

マリー・リエスさんの写真展「二つの世界を繋ぐ橋の物語」。「京都国際写真祭 KYOTOGRAPHIE」の展示の一つで、通常の写真18点と「触る写真」11点が並ぶ。

フランス人のマリー・リエスさんは国立パリ盲学校の生徒を10年間撮影。視覚以外の感覚を使って生き生きと学び、未知と出会う瞬間を捉えた。子どもたちに撮った写真を伝える方法を模索。盲学校で教えていた極度の近視の版画家の協力で、木を彫るなどして被写体の輪郭を表した「触る写真」に変換した。

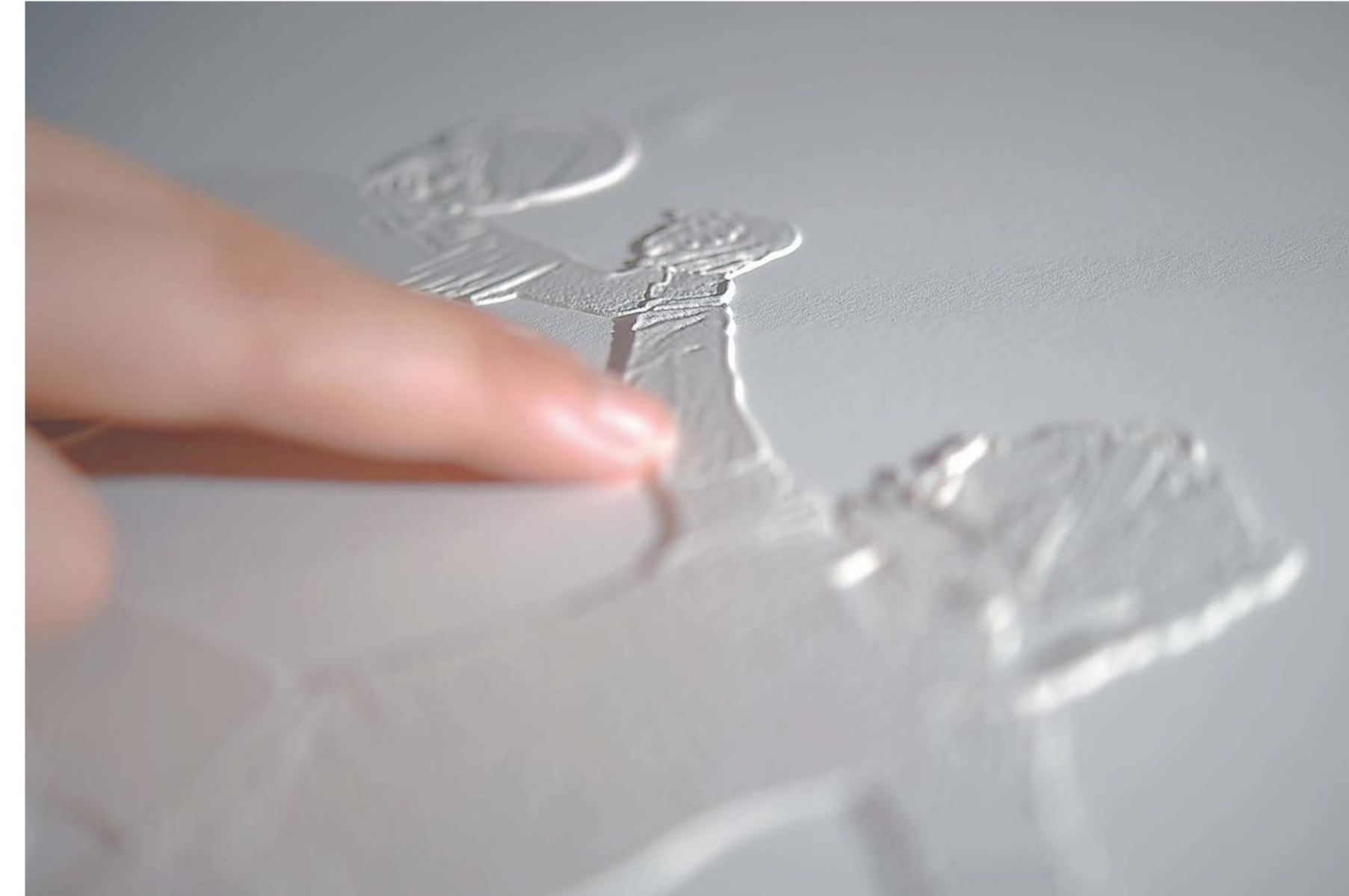
今回は、版画家制作の6枚に、凹凸のある写真5枚を加えた。白い紙の上にインクを盛る写真印刷会社の特殊技術を使い、日本で新たに制作した。

展示会場のアトリエを拠点に活動する美術家光島貴之さん(66)と、国立民族学博物館准教授の広瀬浩二郎さん(52)＝京都大卒＝が協力。全盲の2人の意見を参考に試作を繰り返し、少年の顔やセーターなどの質感の違いを触ってわかるようにした。広瀬さんは「2次元作品を触覚で味わうのは画期的試み。見ることで触ることの違いを体感してもらえたら」と言う。

マリー・リエスさんは写真を撮るだけではなく、撮った写真について話すことで子どもたちと交流した。展示でも「対話」を重視した。

会期中、見える人は「見る写真」を説明し、見えない人は「触る写真」の読み解き方を案内する「ふらっと対話鑑賞」を行う。見えない人に参加を募り、応募があった日時に見える人が申し込んで一緒に鑑賞する。光島さんは「見え

仏・写真家、盲学校の日常を活写



KYOTOGRAPHIE

「二つの世界を繋ぐ橋の物語」

ない人と一緒だと作品をじっくり見る。新たな発見があって楽しいと思う」と話す。

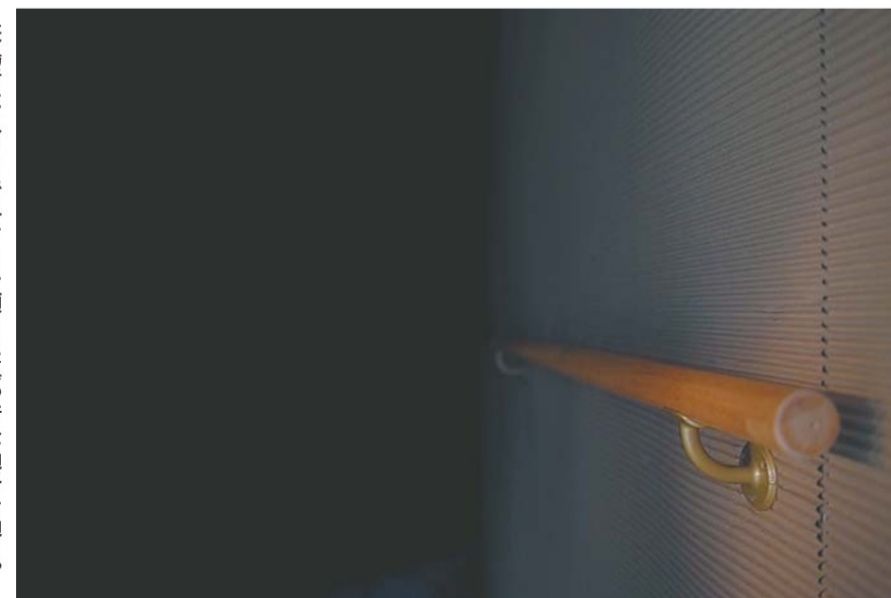
触れることや人との交流は今回の展示の核だが、新型コロナウイルス流行で難しくなった。それでも消毒や人数制限などの予防対策を取り、実施を決めた。触ることが欠かせない視覚障害者は今、外出を控えがちだという。展示を統括するキュレーターの大田万里奈さん(40)＝左京区＝は「他者の状況に寄り添い、共有しようとするのが展示タイトルの『二つの世界を繋ぐ橋』を作る手がかりになるのではないかと力を込める。(松村和彦)

記者も「触る写真」を体験した。「手をつないでいる」という説明を聞くと触れている凹凸の意味がわかり、手の場所をきっかけに子ども2人の姿が頭の中に広がっていった。触って断片的な情報を集める鑑賞法を表すため、一部だけにピン트가合うよう撮影した。全体像は会場で触って感じてほしい(18日、京都市北区・アトリエみつしまSawa-Tadori)

京ゆかりの全盲の美術家、研究者協力 特殊印刷で凹凸

北区のアトリエで18日まで、対話鑑賞も

来場者は入り口で手すりを頼りに真っ暗な通路を通る。見えない感覚を体感する



【展示情報】

京都市北区紫野下門前町44。有料。視覚障害がある人とサポートする人は無料。10月18日まで(9月28日、10月5日、12日は閉館)。午前11時～午後6時。

対話鑑賞は午後2時～午後5時。視覚障害がある人は☎070(4291)3977、もしくは、メールinfo@kyotographie.jpで参加を受け付ける。目が見える人はKYOTOGRAPHIEのウェブサイトの事前予約から申し込む。1日3組まで。



「見る写真」と「触る写真」が並ぶ会場